
神と巫女と記憶喪失少年と

DRIFTBOY924

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と巫女と記憶喪失少年と

【Nコード】

N7267Y

【作者名】

DRIFTBOY924

【あらすじ】

「神なんて居ないんだろうな」
その一言できたのは神社だった。
そこにいたのはその神と巫女だった。

神社生活〜一日目〜（前書き）

ある日、ある神社についた少年。

記憶も失い、親も失った悲しい少年。

「どうせ神様なんていないんだろうな」

そう呟くと、終わりのなさそうな穴に落ちた。

その穴から落ちたところは神社だった。

そこには神と巫女がいた。

その神と巫女との物語。

神社生活〜一日目〜

ある日の帰り道。

僕はいつもとは違う道を歩いていた。

・・・何故か呼ばれている気がしたからだ。呼ばれている気がする所は神社だった。

「こんなところに神社なんてあつたっけな」とりあえずお参りしておこう。

ふう・・・今日はこれぐらいかな

いつも通り掃除を終わり、片付ける。

???「いつも御疲れ様ねえ」

「あ、篤永様」

篤永様はこの神社の神様だ。

篤永「今日はなにか起こりそうなのよねえ、そう思わない？ 映香・

・・・
「え？そういえばそんな気もしますね・・・」

「記憶が戻りますように・・・」

昔、事故にあつて親も亡くし、記憶喪失もした。

一応学校には通っているが・・・

「今まで何回かお願いしているがどうせ神なんて居ないんだろっとな」
そう呟き、そこを去ろうとした。

「!?!?」

その瞬間、どこまでも続きそうな穴に落ちた。

「うわあああああああ……」

「……？何か来る……！」

篤永様は部屋でお休みになられている。

「ここは私がお守りしなければ……！」

・

「おわあ！？」

「……？きゃあー！」

どこかに落ちた。……よく持つな、自分の体。

「……いてて……」

「……？あ、貴方は誰ですか！篤永様には合わせませんよ……！」
「……？巫女さんだろうか、何故か睨まれている。

「ちよつと、いいか？此処はどこだ？」

「……？え……？篤永様を狙いにきたんじゃないんですか？」

篤永……？誰だろうか。

「君の勘違いじゃないか？僕は篤永さんなんて知らないぞ？」

「……？あ、そうですか……。それでは何故ここに……」

そつえば、穴に落ちたんだっけ。

「なんかお参りしたら落っこちたんだが」

「……？意味が分かりませんね」

「……にしても、この巫女さん凄く綺麗だ。

考えてる姿も可愛い。

どうしようか、このまま話すのも気苦しいし、名前を言っておこう。

「あ、僕は蒼って言います。貴方は？」

映香「私は映香って言います、よろしくお願いします」

・

・
映香「成る程・・・それで、此処にきたと・・・」
「そんな感じだ」

神社の中に入れてもらい、控え室みたいなところに入れてもらった。
篤永「おーい映香・・・。って誰あんた」

「あ、蒼って申します。映香さんにお伺いしたのですが、貴方が篤永様でしょうか？」

篤永「ああそうだけど・・・。ちよつと映香いいかい？」

映香「あ、はい。蒼さんちよつと失礼します」

「ああ、行つてらっしゃい」

・
・
篤永「おかしいねえ・・・何時もなら即刻退場させるあんたが何故・・・」

映香「いえ、なんか感じて・・・それで、話してたら良い人だなんて思つて」

篤永「（恋ね）」

映香「どうかしましたか？」

篤永「いや、なんでもないよ　面白くなつてきた」

映香「????」

・
・
ガラガラッ

あ、戻つてきたようだ。

映香「すいません、失礼しました」

「ああ、気にしないで」

篤永「蒼、あんた家分かる？」

「いえ、分かりません・・・何しろ此処は何処なのかも」

篤永「ああ、此処はね、外の世界で言うなら幻想郷ってところかな。あんたが今まで居たのは外界。ここは幻想郷よ」

「幻想郷・・・ですか。じゃあ僕の家はこの世界にない訳か」

篤永「あんた、親は？」

親、か。顔も思い出せないし、名前も思い出せない。知っているのは死んだことだけだ。

「・・・昔、交通事故で両方とも亡くなりました。しかも、記憶喪失までしました」

映香「親無しで記憶喪失ですか。そうですね、この世界にも色々いますし、此処に住まれては？」

「え、でも迷惑じゃないですか？」

篤永「あらあ、良いわよそんな事。私も許すわ」

「・・・それじゃ、お言葉にお甘えして」

映香「これで貴方も私たちの家族です。一緒に頑張りましょうね」
家族、か。久しぶりに意識した。居候の身になるってことだ、お礼は自分からしていこう。

篤永「先に部屋行ってるわね」

映香「それでは蒼さん、着替えてきてください」

「え？あ、袴みたいなやつ？」

映香「そうですよ。はい、これです」

「じゃあ着替えてくるけど、どこで着替えればいいかな？」

映香が迷った。

映香「それでは私の部屋でどうでしょうか？」

「ブツ」

映香「冗談です　着替えでしたら蒼さんの部屋がありますのでそこをお願いします」

「さっきの冗談は嬉しかった気がする」

映香「え・・・（赤面）」

「それじゃ、着替えてくるよ」

ガチャ（ドアノブの音）

「ふう、着いた。さて着替えよう。えっとコレがここので……」
それで次はココをこうするんだっけな。

「……なんで知ってるんだ？」

・
・
・

映香「蒼、さんか……。かつこいい人だな」

ガチャ（ドアの開いた音）

映香「!？」

「どうした？」

映香「……聞こえてなかったですよね？」

「え？何のことだ」

映香「よかて」

篤永「今映香が蒼のことカツコいって言ったんだよーん」

「え？」

映香「いやあああああああつ!!!!」

バコツ ドカツ ベキツ

「何故僕が殴られる!？」

映香「忘れてください……ほんとに……」

映香がなみだ目で訴えかけてくる。……可愛い。

「……泣かないでよ、ほらハンカチ。あと聞いてなかったから、安心して」

映香「ぐすつ……ありがとうございます」

……ダメだ、押し倒しそうだ。此处は我慢だ、僕……

映香「それにしても、蒼さんとっても似合っていますね」

「え、そうかな？あ、有難う」
何故かとても嬉しかった。今まで褒められても別になにもなかったけど。

篤永「（ニヤニヤ）」

「篤永様、何故にやけているんですか？」

篤永「まあがんばれ、若人よ！」

映香「????」

映香が頭に疑問を浮かべていた。

篤永「それじゃ、私は仕事してくるわね」

映香「行ってらっしゃいませ」

「おお、行ってらっしゃいませー」

・・・しばらく無言の状態が続いた。

沈黙を破ったのは映香だった。

「あ、あの蒼しゃん！」

噛んだ。盛大に噛んだ。

「え、あ、何かな？」

映香「あ、あの・・・いつまでも敬語もやり辛いですし、気軽にやりませんか？」

「ああ、うん。じゃあどんな風に呼べばいいかな、僕は呼び捨てで構わないよ」

映香「じゃあ、あ・・・お、映香って呼び捨てで言うてください」

「ああ分かった映香」

映香「はうっ！感激・・・」

映香が赤い顔で頬を触っていた。そんなに恥ずかしいのだろうか。

「じゃあ映香、なにかお手伝いできないか？」

映香「じゃあもうすぐ時間ですしお料理を」

「映香、敬語になってる。タメ語でいいから気楽にやろうぜ」
笑って話した。

映香「あ、はい！蒼、がんばろ！」

笑顔で返してくれた。ああ、良い娘だなあ……。

映香「蒼料理上手いなだね」

「伊達に一人暮らしてたわけじゃないしな」

映香「（ほんと、かつこいいよなあ……）」

篤永「おやおや、仲良くやってるじゃないかい。今日はなんだい？」

「俺の特製メニューだ。外界クオリティを見せてやる」

篤永「それは興味深いね。ちやちやつと作っておくれよ」

映香「……ふふっ」

・

「そんじゃ、集まったな。じゃー代表して僕が……」

少し間をあけて、

「頂きます！」

二人「いただきますーす」

映香「どれも此処にはない料理ですね」

篤永「なんだ、生の魚を食わせるのか？」

「醤油につけて食ってみろ。上手いぞ」

篤永が言われたとおりに食べる。映香も食べた。

篤永「……美味しいな」

映香「ほんとですね」

「ほとんど焼き魚か？」

映香「魚はそうですね。生で食べるとは知りませんでした」

篤永「おい、この白い魚はなんだ？」

「河豚だ」

周りが凍りついた。……何故だ？

映香「河豚って毒入ってるんですよ……、蒼さん、殺す気です」

か？」

篤永「神を殺そうとは良い度胸だね・・・」

「さて、二人とも。河豚は全部が毒ってワケじゃない。食べれるとこだけだ」

二人「証拠は？」

「俺が食ってみせる」

醤油につけて食べる。やっぱり河豚は上手い。

「美味いぞ」

映香が恐る恐る口に運ぶ。

映香「美味しい」

篤永「私は食べないぞ・・・絶対毒が入っているんだ・・・用心棒だなあ。無理やり食わせるか。」

「篤永、口をあける。空けないなら無理やり空けさせてやる」

篤永「嫌だね！誰が食べるか！」

「ほう・・・映香、ラジオペンチはあるか？」

篤永「ごめんなさい！食べます！」

神に勝った。

篤永「うう・・・。こんなものはまバクッ美味しい。」

「な？だから映香も美味しいっていったんだ」

篤永「ごめんなしゃい・・・」

・
・
・
「それじゃーご馳走さまでした」

映香「ご馳走さまでした」

篤永「あー、食った食った。そういえば蒼、さっきの料理ってなんていうんだ？」

「刺身だ」

篤永「よし、明日から私がそれ食べたいっていったらそれを作るが
よし」

「ああ。だが、食いすぎはデブの元だぞ？」
三人で笑った。

「（ま、魚でデブるって聞いたことないけどな）」

映香「それではお片付けしましょうかね」

「映香、僕も手伝う」

篤永「じゃ、私は自分の部屋で寝てるわ。お風呂の時間は起こしてね」

「了解」

・
・
・

「さて、映香手伝うぞ」

映香「え？別にいいのに・・・（ガチャガチャ）」

映香が冷たい水の中、食器洗いをしている。

映香「痛っ！」

「どうした!？」

見ると、指に切り傷が出来ていた。

映香「食器の中に包丁がまざっていたんで・・・って蒼!？」

怪我に黴菌が入るといけないので、舐めることにした。

映香「ちょ、いや・・・蒼・・・」

「黴菌が入るといけないからな。後は・・・よっと、ハンカチで守ってやればいい」

映香「あ、ありが・・・とう（赤面）」

ちなみに犯人は篤永でした

「映香、休んでな。後は僕がやる」

映香「あ、うん・・・」

・
・
・

映香「はあ、なんで今日会ったばかりなのにこんなに意識しちゃう

のかな・・・篤永様はなんかにやけてたし・・・」

「よし、最後の一枚だな・・・」

ガチャリ

「ふう、終わった・・・おい、映香あー！」

映香「呼んだ？」

「ちよつとね、神社の中を散歩しながらでも案内してくれないか？」

映香「え、でも今、夜だし・・・。まあいつか、案内してあげましょう」

「ありがとう」

「やっぱり寒いな・・・」

映香「でしょ？だから夜つていったじゃん」

「ごめんな、でも映香とだったら別にこんぐらいなんともないぜ」

映香「え？（赤面）も、もう・・・お世辞なんて」

「お世辞じゃないが？本当のことだ」

映香「あ、そう・・・なの・・・」

映香がうつむいてしまった。どうしてだ？

「ま、歩こうぜ」

映香「そうね、で、あそこに見えるのが・・・」

「実は作者、そんなに神社とか知らないんだ。ご了承くださいな」

映香「どうしたの？」

「気にしないでくれ。で、あれはなんだ？」

映香「これくらいかな」

「おう、ありがとうな。・・・今日は良い天気だ。星が良く見える」

映香「そうね・・・綺麗だわ」

・・・映香が見上げている。そんな映香のほづが・・・

「可愛いよな・・・、映香は・・・」

映香「え・・・」

「いや、真面目に・・・」

映香「ふふ、嬉しいこと言ってくれるじゃないですか」

「・・・はは」

映香「ふふっ」

とても星が綺麗だった。

・
・
・

「部屋の中はやっぱ温いな」

映香「暖かいですね　そろそろコタツを出してもいいくらいかな

・・・」

手伝うぞ、と言おうと思ったら

映香「手伝ってくださいね？」

「あ、おう・・・」

・・・先を越されてしまった。

お風呂センサー「お湯が沸きました。お湯が沸きました。」

「へえ、風呂が沸くとなるのか。便利だな」

映香「そうですね・・・さて、篤永様を起こしに行かなくては・・・

」

「僕が行こうか」

映香「女性の部屋に入るのはタブーですよ」

映香が笑いながら言った。

「そうだよな。男性が入ったら変なものな」

笑って返した。

映香「篤永様、お風呂ですよー」

ぱたぱたと歩いていった。

「……さて、僕はどうしようか。にしても一人称使いにくいな。明日から俺にしよう」

映香「蒼ー！手伝って……」

「あ、どうしたー？今行く」

・

「はあ、はあ……。まさか篤永があんなに熟睡するなんて……」

映香「日ごろ、の、疲れ、が、たまってるんでしよう、ね……」

起こすのに大分かった。

「そっぴや俺……じゃなくて僕が女性の部屋に入ってよかったのか？」

映香「いや、大丈夫ですよ。気にしないでください。……あと、一人称「俺」のほうがかっこいいです」

そっぴや、といおうと思った瞬間……。

映香が倒れた。

「映香！どうしたー！」

映香「大分……疲れたようです……」

「まってるよ、一番近いのは俺の部屋か……。今から連れていくから、ちよいと抱かれてる」

映香「……」

・

「よし、これで安静にしてれば良いはずだ」

映香「すいません……。お手数かけてしまって……」

「気にするな。明日からはゆっくりしておけ」

映香「ですが」

「俺がやる。だから安心してくれ」
笑顔で言った。

映香「そう、ですか……。すう……」

映香は寝たようだ。

「さて、俺の部屋だが……。どうやって寝るかな。床で寝るか」

・
・
・
「あ、篤永」

篤永「どうした？湯加減はよかったぞ？」

「映香が過労失調で倒れた」

篤永「え！？」

「明日から看病してやってくれ」

篤永「いや、蒼がやるといい」

「え」

篤永「ま、頼んだぞ　私は明日から仕事でいないのでな」

「出張か？」

篤永「ま、そんなところだね。じゃ、おやすみ」

神にも出張があるんだな……。さて、看病を任されたけどどうするかな……

・
・
・
ガチャ（ドアを開けた音）

映香「蒼……？」

「ああ、起こしてしまったか。すまない」

映香「いえ、気にしないでください……。蒼、風邪の間だけ一緒に寝てくれませんか……？」

「え……。俺は別にいいが、何故？」

映香「・・・一人じゃ怖いんで・・・」

「そっか、映香は可愛いな。分かった、一緒に寝よう」

映香「ありが、とう」

・
・
・

「映香、入るぞ」

映香「あ、はい・・・」

ガサゴソ（布団に入る音）

映香「蒼・・・。寒くない・・・？」

「映香こそ、大丈夫か？」

映香「私は大丈夫・・・。蒼、もっと近寄って・・・」

「・・・分かった、無理はするなよ」

映香「うん・・・、蒼、お休み」

「おやすみ」

おまけ

「おい、映香・・・って」

映香「すう・・・すう・・・」

映香の顔が前にある。

「・・・!!!」

性欲が爆発しそうになった夜だった。

波乱な二日目！？

小鳥のさえずりで目が覚める。

・・・映香は起きたのか？

「ううん・・・ん」

体を起こそうと思ったそのとき、

「え・・・？」

映香が片手を抱いていた。

「映香・・・腕・・・」

映香「離しませんよ・・・ やっと捕まえました・・・」

「映、香・・・」

映香「もうすこし、寝てください・・・」

・・・どうしようか・・・

「だが映香、もう10時だ・・・。起きてご飯を食べよう？」

映香「そう、ですね・・・。じゃあ、ごはん、作ってきます」

「いや、俺がお粥を作ってくる。だから待っていてくれな？」

映香「・・・はい」

・
・
・

ガチャ（ドアを開けた音）

「映香、粥だ。食べてくれな」

映香「申し訳ございません・・・。直、復帰します」

「いや、ゆっくりでいい。俺も映香の世話できて嬉しいしな」

風邪のせいで映香の顔は赤かったが、もっと赤くなった。

何故だろうか。

「どうした？」

映香「いえ・・・。それでは、頂きますね」

「ほら、あーん」

映香「え・・・あ、あーん(ぱく) 美味しいです・・・」

「そうか。俺も食べよう(パク) うん、我ながら美味しい」

映香「え、今の蓮華・・・私口つけましたけど・・・」

「気にしない。俺はな」

映香「(赤面)」

「さて、もつと食べる」

映香「あ、はい・・・あーん」

・
・
篤永「今頃二人で頑張ってるかねえ・・・。もしかしたらキスマで

してるかも」

・
・
「さて、片付けしようかな・・・。映香の傍に居たいけど、ちょっと行ってくるな」

映香「あ、はい・・・」

ガチャ(ドアノブの音)

ガチャ(ドアノブの音)

「(さて、置いて直部屋に戻ろう・・・)」

ガチャン(置いた音)

ダツダツダツ(走る音)

ガチャ(ドアノブの音)

映香「あ・・・」

「・・・何してた？無理してないだろうな？」

帰ると、映香が立っていた。

映香「いえ、もう大丈夫・・・おとと」

「ほら、無理するな。傍にいてやるし、眠たくなったら膝枕でも腕

枕でもしてやるよ」

映香「(・・・それは魅力的だなあ)・・・わかりました。ですが、

一つお願いしていいですか？」

「・・・本当に俺がやるのか？」

映香「世話してくれるんじゃないんですか？」

「その割には楽しそうじゃないか。ま、やってやる。背中拭くぞ」

映香「お願いします」

・・・映香に汗拭きを頼まれた。とてもスタイルも良い上、背中はスベスベだし・・・

「（触らずにはいられない）」
サワッ

映香「ひゃあっ」

「・・・ごめん、つい」

映香「・・・（赤面）触りたいならどうぞ」

「え」

映香「ふふっ」

さて、吹き終わった・・・が、

映香「蒼さん・・・眠たいです・・・」

「ん。膝枕か、腕枕か。どっちがいい？」

映香「腕枕でおねがいます」

「分かった。ほら」

自分がだした腕に、映香の頭が乗っかってきた。

「無理するなよ。心配だし・・・」

映香「（うわぁ・・・蒼さんの腕、やわらかいし、暖かい・・・）

このままで居たいなあ・・・」

「・・・眠れよ。俺も眠たいし」

映香「はい・・・」

・
・
・

「すっかり寝てしまった・・・。昼飯のこと忘れてしまった・・・」

映香「ううん・・・むにゃむにゃ・・・蒼・・・」

「・・・え？ 寝言で俺のこと言いつて・・・？」

映香「蒼、気持ち良いよ・・・」

「・・・」

意味が分からなくなった。何故映香さんみたいな美女が俺のことを呼ぶのだろうか。

少し、頭痛がした。

「映香・・・俺は・・・お前のことが・・・」

・

・

・

映香「ううん・・・蒼・・・？」

「映香、起きたか」

映香「うん・・・」

映香も起きたことだし、なにか作ってやるか。

「映香、なにか食べたいのあるか？」

映香「・・・お茶」

「分かった。腕、抜くぞ」

綺麗な茶髪の髪が腕にかかる。

「はは、映香の髪の毛はサラサラで綺麗だな」

映香「・・・自慢ですから」

映香が微笑んだ。

「じゃ、お茶持ってくるな」

・

・

・

「映香、お茶だ」

映香「有難う・・・。入れてくれたの・・・？」

「ああ、沢山汗かいて悪い物を体の外に出したほうがいい。そういえば、トイレは大丈夫か？」

映香「ん〜、我慢できないってほどではないけど・・・（赤面）」

「そうか、じゃあトイレまで送る。ほら、抱いてくから」

映香をお嬢様抱っこしてトイレまで送る。

映香「ありが・・・と（赤面）」

映香が出てきた。

「よし、よいしょ・・・と」

映香「私、重いでしょ・・・？別に無理しなくても・・・」

「重くない。無理もしてないし、気にしないでくれ」

映香「でも・・・」

「頼ってくれ。頼ってくれたら何でもやる。直ったらな」

笑って話した。すると

映香「そっか」

と、笑いながら返してくれた。

・
・
・

「みかん、食べるか？」

映香「ごめん、わたしみかんはダメなんだ・・・」

「そっか、ごめん。じゃあ柿は？」

映香「柿は好物です。美味しいです」

「奇遇だな、俺も柿が好きだ」

映香「ふふっ。じゃあ、二人で分け合って食べましょう」

「いいのか？じゃ、お言葉に甘えて」

柿の皮を剥く。そしてそのまま渡し、

「好きなだけ食べる。残りを俺が食べる」

映香「え？二つに分けちゃダメなんですか？」

「今は映香が病人だ。俺は弱いもの見方だ」

映香「・・・ふふっ、やつぱ蒼さんは面白い方ですね」

「そっか？ ほら、食べな」

「映香・・・。もっとお前のことを知りたい」
映香「蒼、わたしも・・・きて」

おまけ

「映香、気持ちよかった」

映香「まったく旦那様ったら・・・」

蒼と滄。 3日目（前書き）

昨夜、体を交えた二人。

その様子を伺っていた一人の青年。

そして姿を現した、赤い存在。

蒼と滄。 3日目

映香「おはようございます」

「あ・・・おはよう」

服を着ていない自分と映香。ああ、俺は昨日・・・

映香「旦那様、今日からよろしくお願ひしますね」

「え、あ、うん。そーいや、映香もう直ったのか？」

映香「昨夜、汗を飛び散らしましたから・・・（赤面）」

「と、とりあえず服を来よう？」

映香「そうですね」

着替えはあそこのクローゼットにあるはず・・・

????「ふうん・・・？あんた神のくせに弱いじゃないか

篤永「貴様・・・貴様はなんだ・・・？」

滄「そうだな・・・蒼なら滄というべきか？ 早い話アイツの兄つ
てところだ」

篤永「!？」

滄「ま、眠つとけよ・・・。さらばだ」

篤永「う、うあああああ！」

「さて、映香」

映香「あ、はい。お料理ですか？」

「よし、分かってるな。幻想郷ならではの料理ってないか？」

映香「うーん・・・。殆ど外界からですから・・・」

ふむ。幻想郷は外界が基本なのか。

じゃ、ここはこーししよう。

「じゃあ映香の得意料理で頼む」

「……!!」

映香「だ、誰ですか貴方！」

淦「女は黙ってる。Moon Night!」

なにか大男の下に陣ができた。

淦「眠れ……」

映香「うっ」

映香が倒れた。

「映香! どうした……!」

淦「おいおい、蒼。眠ってもらっただけさ」

「貴様……!」

淦「おー怖い怖い。あ、ついでだ。コイツ返すぜ」

何かを投げてきた。

「!!」

篤永だった。

篤永「あいつは……危険だ……!」

そういうと、篤永は眠った。

淦「ああ、自己紹介が遅れたなあ……。実の兄では無いが、お前

の兄貴だよ……。蒼。そして俺の名前は……。淦」

「淦……!」

淦「……どこかで効いたことがある……」。

淦「これだけでも思い出せないか……。じゃあ思い出させてやる

う……」

そういうと淦は指を鳴らした。

「……? がああああああああああああああああああああ

あああツツツ!!!!!!」

尋常じゃない頭痛がする。

これは……昔の自分……?」

『赤のお兄ちゃん……。此処どこ?』

淦『あ? てめ、何でそんなに血が出てるんだ!?』

『ぶーぶが僕のところに飛んできて、おとーさんとおかーさん動かなくなっちゃって、泣きながら歩いてたら赤のおにーちゃんに会った』

塗『そうか……。じゃあ、その怖かった記憶を消してやるっ』

『え？ぼく、おとーさんとおかーさんのこと忘れるの？』

塗『そういうことになるな。まあ、喰らってけや。アゼンタリ・ゾーン』

『え……。あああああああ！痛い……。痛いよおおおおお！』

塗『チビ、後少しだ……。我慢しな。我慢できたら……。褒美をやる』

『はあー、はあー』

塗『よく耐えたな。よし、褒美をやるっ。ほら、よ』

そうか。俺はコイツに……。塗に、記憶を消されたのか。

「塗……。お前、なんで良い奴だったのに……」

塗「あー？そんなのどうだっていいんだよ。お前の成長ぶりを見に来ただけだ……。ってなあ！」

塗が急接近してくる。

「うおわあー！」

塗「針術式その六七参……。棘の雨！」

「うお……。マジかよ」

容赦なく棘が降り注ぐ。

「うぐっ……。だがこれくらい……。！……！」

塗「おいおい、蒼。守ってばっかりじゃつまらねえぜえ！？」

「く……。そんなこと言われてもなあ、こっちは何も持ってねえからな」

塗「ククク……。まだ記憶の蓋が閉じかかっているか……。じゃあ、空けてやるっ……」

また、塗が指を鳴らした。

「????」ほら・・・蒼、この剣はな*****って言ってな、これでお父さんは魔物を退治してんだ」

「????」お父さん、それどうする気？蒼にあげても持てないわよ」

「おとーさん、おかーさん、大丈夫！僕、体の中に入れれるから！」

「????」ああ、そうだったな。じゃあ、この呪文を覚えておくんだぞ。いいか・・・」

「剣術式九九九式・・・蒼空秋刀」

両手が光っていく。

そして、光が収まった頃、両手には日本刀らしき細長い剣が持たされていた。

「行くぞ・・・塗」

塗「いいねえ・・・。来いよ、全部跳ね返してやる」

その刀は、とても軽く長い。それを生かし、一気に塗の懐へ飛び込んだ。

塗「！」

「でやあ！」

塗にかするも、服だけしか切れなかった。

「剣豪強化術式参八式！蒼雷秋刀！」

さつきよりも重さが増し、剣の長さも短くなったが大剣になった。

「うおおおおお！！！！」

塗「ふうん・・・？なかなかやるじゃないか・・・。だが、俺のほうが強い！雷呪文展開式七四壱式！」

「プライデント・サンダー！」

頭上から大きな稲妻が降ってくる。

「地呪文展開式・・・四巻！ 火山岩鎧！ 鉄呪文展開式巻、リフレクトドーム！」

火山岩は、軽くそれ程の防御力もある。それに合わせて鉄で自分を囲う。鉄に触らなければ感電することはないはず。

ズドオオオオオン・・・

「くっ・・・。なんて馬鹿力だよ・・・！ 呪文、解除」
解除した瞬間、塗が目の前にいた。

塗「うらあああああ！」

大きな拳が鳩尾にヒットし、何千メートルと飛ばされた。

「うぐうっ・・・」

口から血が出、壁に打ち付けられた。

塗「おいおい・・・そんなもんかあ？ がっかりしちゃってコイツら殺しちゃったぜ？」

塗が両手で持っているものは・・・

もはや死んでいる、篤永と映香だった。

「篤永・・・映香・・・！ 貴様あああああああああああ
あ！！！！！！！！」

その瞬間、自分は勝手に動いていた。

許さない。許せない。

殺す、殺してやる。

・・・篤永を返せ。

・・・映香を・・・映香を返せ！！！！

篤永「はは、有難うな」

「篤永・・・映香・・・！」

ゆっくりと、そして強く二人を抱きしめた。

映香「これからもよろしく、蒼・・・」

篤永「よろしくな。蒼」

「・・・ああ、よろしく」

涙と鼻水が止まらない。

「へへ・・・不細工だろ？ さあ、帰ろう・・・」

蒼と滄。 3日目（後書き）

いやー、滄^{あか}って強いですね。まだ僕も小説書きはじめなのでまだまだですが、これからも宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7267y/>

神と巫女と記憶喪失少年と

2011年11月22日01時11分発行